



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

保健体育科が育成を目指す資質・能力とATLスキルとの関連

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-07-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 橋本,みゆき, 深澤,祐美子, 佐藤,毅, 谷口,善一, 川原,拓也, 板村,邦弘 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/159275

保健体育科が育成を目指す資質・能力と ATL スキルとの関連

Relationship between the qualities and abilities pursued by the Physical and Health Education Division and ATL skills:

保健体育科

◎橋本みゆき 深澤祐美子 佐藤毅 谷口善一 川原拓也 板村邦弘

要旨

本年度は、保健体育科がとらえる資質・能力と ATL スキルとの整合性を検討しながら、ATL スキルの向上を図り、なおかつその伸長をどのように生徒にフィードバックさせていくのかということを検討してきた。昨年度、ATL スキルのひとつであるメディアリテラシーに着目し、ダンスの授業実践を行ったことにより、単元活動の幅を広げ、生徒の持っている資質や能力をより良く活用し一定の成果が見られた。これをふまえ、本年度も ATL スキルに焦点は当てつつ、生徒の学習ノートを大幅に改訂し、それを活用することによるスキルの向上を試みた。これまでも行ってきた毎時間の振り返りは、CriterionC（応用と実践）について端的かつ明確に記録できるものにし、単元の「はじめ」では目標を「観点ごと」に立てさせ、単元の「おわり」でも「観点ごと」に振り返りをさせた。時間数の多い単元には「なか」ページを設け、ここでも観点ごとに振り返り、後半への自己課題を解決させる指針となるようにした。

これにより、学習ノートを「書く」ことだけでなく、動きとして表す手立てとする短い言葉を用い、理解し合ったプレーにつなげるといような、書いたことを「応用・実践」する・しようとするのがスムーズになる場面が見受けられた。ATL スキルの中の振り返りスキルの向上とも言える。ただ、それはまだ一部の生徒であったり、限定的であったりと、明らかな成果とは言いがたいと考えられる。

来年度、より実践的なスキル向上につながるツールとしての学習ノートとなるよう、活動と共に充実したものすべく内容をさらに検討していき、保健体育科がとらえる資質・能力と ATL スキルとの整合性を図っていく。

Ⅰ. 保健体育科が育成を目指す資質・能力と ATL スキルとの関連

Ⅰ. 昨年度までの経緯

保健体育科では、MYP 保健体育のガイドにある4つの評価規準（保健分野は規準 B と C を除く2つ）に沿って授業を実施している。実際の学習活動においては、それぞれの評価規準の内容に基づいて明確に分離することは難しいが、本校では、保健体育科における学習活動を以下の6つに大別している。

- 実践：体育分野における運動場面
- 検討：自身やグループの行動を方向づけるための正しい情報や経験に基づいた選択
- 行動選択：知識・理解等に基づく具体的実践を行う上での決断や判断
- 合意形成：集団種目及びグループ活動における意思の共有や決定
- 省察・記録：学習活動を振り返り、内容を整理することを通じた意識の顕在化
- 意思決定：学習内容に基づく自己の生き方に関わる方向づけ

昨年度までに、この保健体育科における学習活動を6つに大別した（キーワード）の学習活動と ATL スキルの関連を検討し、学習内容・活動で分類することを行ってきた。

また、後期課程における学習指導要領と本校のMYPの関係については、新学習指導要領の3観点でとらえることとし、知識・技能にかかわる活動を「実践」、思考力・判断力・表現力にかかわる活動を「検討」「行動選択」「合意形成」、学びに向かう力・人間性を「省察・記録」「意思決定」と置くこととした。図1は、保健体育科における具体的な学習場面をATLスキルと評価規準から整理したものである。

昨年度までは、6つの学習活動とコミュニケーションスキル・協働スキル・情報リテラシースキル・メディアリテラシースキルとの関係について研究を行ってきた。昨年度までに、上記の4つのスキルに着目をし、実践研究を行ってきたが、常に学習ノートにおける振り返りを「省察・記録」として行ってきた。その中で、生徒たちはすべてのスキルについて振り返ることはされてきたが、MYPにおける4つの評価規準に則して振り返ることがされているかについては、あまり明確なものであったとは言えない形式のものであった。ATLスキルに着目することも授業実践の中では重要なことではあるが、4つの観点に沿って評価活動がなされているからには、その点においての自己の振り返りをより明確にさせていく必要があると考え、まずは学習ノートの改善を行うことが必須であると考えた。

評価規準		規準 A	規準 B	規準 C	規準 D
ATL スキル		知識と理解	活動の計画	応用と実践	活動の振り返りと改善
コミュニケーション	コミュニケーションスキル	合意形成		実践	省察・記録
社会性	協働スキル				
自己管理	整理整頓する力				
	情動スキル	実践			
	振り返りスキル	行動選択		意思決定	
リサーチ	情報リテラシースキル	行動選択／検討			
	メディアリテラシースキル				
思考	批判的思考スキル	検討		実践	
	創造的思考スキル				
	転移スキル	行動選択／検討			

※資質・能力の3つの柱の色分け

知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性
-------	-------------	-------------

図1 保健体育科学習場面における ATL スキルと評価基準の関連

II. 学習ノートの改善の必要性

従来の学習ノートは、どのような活動を行ったか、そこでの課題は何か、課題を解決するためには何が必要なのか、この3点を主に記述させるものであり、1つのATLスキルについて記述するような形式でも1つの評価規準に関して記述させる形式でもなかった。振り返り自体が行われていないわけではなかったが、次にそこでの課題を解決するためのものとして活用されているものとはいいがたい記述内容であった。

そもそも振り返ることの本来の意味としては、その単元が個人種目、チーム種目に関わらず、次の授業において課題が明確にされていく手段として存在するべきである。学習ノート自体は、規準B「活動の計画」と規準D「活動の振り返りと改善」の項目の評価対象になるものである。しかしながら、昨年度までの現状としては、内容的な質よりも量を書くことに重きが置かれているような記述内容であり、本来の手段として活用されているとは言い難かった。この点において、大きな改善の必要性を感じ、今年度は、学習ノートをより評価規準に則した形式にすることで本来の振り返りを重視した記述に変化する、併せて振り返りスキルの向上を図ることができるのではないかと考えた。

III. 学習ノートの改訂

大きな変更点は以下の2点である。

- ①単元の「はじめ」に目標を、単元の「なか」「おわり」に振り返りを記入するページを追加。
- ②毎時間の振り返りの量を半分以下に削減。

①については、従来の学習ノートでは毎時間の振り返りにとどまっておき、単元全体での振り返りが不十分であった。生徒にとってはその時間その時間での振り返りに終始しており、あくまでも次回に向けての内容に留まっていた。そのため、振り返りを行う内容（観点）に偏りやバラつきがあり、結果として単元が終わったあとに自分自身のどこが成長したのかが把握しづらい状況であった。また、ユニットプランにおいて探求テーマや目標を設定しているが、生徒自身にその視点を持たせることができていなかったため、単元を通しての見通しが不十分であった。

今回の改訂で、1時間毎という“点”の振り返りから、「はじめ」に生徒自身の目標を設定し、「なか」「おわり」での振り返りを行うことによって、“線”としての振り返りが行えるようになった。つまり、単元全体での成果と課題を明確にすることで、次の単元へとつながる振り返りになったといえる。

②については、前述したように書くことが目的になってしまっていることを改善するための施策である。生徒の負担感を減らし、「書かされている」のではなく「自らのために書く」ようにするだけでなく、量を限定することによって、「自分自身のパフォーマンスの改善に今最も必要なことは何か」を整理することを求めた。単に学習内容や自身の感覚の記述に留まるのではなく、学習内容と自身の感覚をふまえ、自分自身の取り組むべき課題に優先順位をつけ、トライ&エラーの効果を最大化させることを狙いとしている。学習ノートにおいては、自身の感覚を言語化するとともに、改善に向けた最も効果的と思われる実施策を考え、実行することが重要である。つまり、教科書に書いてあるような運動の実践のポイント多く集めることよりも、自分自身の感覚を理解しながら、いかに“自分にとって”の最適な改善策を見つけることが重要である。

今回の改訂で1年～6年までが原則同じ様式の学習ノートとなった。単元と単元をつなげることができるような内容に改訂され、今後6年間を通しての学習効果が得られるよう継続していくことが重要になる。学習ノート改訂の成果については次の章で検証を行うが、生徒自身がより学習ノートの効果をより実感できるような授業展開も同時に必要であるため、その部分についても引き続き取り組んでいかなければならないと考える。

IV 学習ノートの成果

IV-1 第2学年における学習ノートの状況

2学期に行った球技の単元で、学習ノート評価が上位と下位の生徒を対象に、1学年時の同時期に行った球技の単元における旧様式の学習ノート使用時の状況との比較を行う。2学期の単元を選んだ理由としては、学習ノートの使い方や書き方に関する指導を受けており、学習ノートの位置づけについても理解し、不慣れであることが記入内容に与える影響が少ないと考えたためである。

まずは、上位の生徒についてである。資料1に示した旧様式において「課題→改善ポイント→改善のための方法」の流れで記入する部分に注目してみると、活動内容を振り返りながら課題とその改善方法までが整合性をもちながら記入されているが、本時の学習を受けて次時のめあてを設定するところまでは至っていない。新様式では、旧様式に比べ記入欄が小さくなっているため記入量が減少しているが、その分ポイントが整理されている。さらに資料2から次時のめあてまで整合性をもった設定をすることができていることがわかる。

次に、下位者である。資料3から「課題→改善ポイント→改善のための方法」という記入の流れを示しても、整合性をもった記述や具体的な方法を十分に示すところまでは至っていないことが分かる。そして資料4に示す新様式では、「はじめ」に書く単元の目標では、具体的な学習の見通しを持つことはできず、簡単な言葉だけを羅列しているにとどまっている。しかし、毎時間の記入欄に注目すると本時のポイントを把握できるようすが読み取れる回数が増え、さらに見出した課題が次時のめあてにつながりやすくなっていることが分かった。

IV-2 新様式の成果と課題

新様式にすることにより、評価の上位者と・下位者ともに本時の取り組み内容から課題をみつけ、その課題を次時の授業のめあてに設定することができていた。これは、ポイントを整理して書くことで課題の把握がしやすくなったことがその要因であると考えられる。さらに、生徒のみではなく教員から前回の授業で生徒が書いた内容を紹介することが増えた。このことから、新様式のノートは教員側の次の授業プランの修正にも役に立つことが言える。

一方で、様式の課題としては、毎時間の課題と次へのめあてを記入する際に、生徒自身が感じた内容で記入されており、教師側で設定した単元計画の流れに沿わないめあてを設定をすることもあった。そこで、ノートにループリックと合わせながら単元計画も生徒に示し、大きな単元の流れも理解しながら見通しを持たせる工夫が必要である。ただし、学習を進めていくにあたって生徒の実態に応じて単元計画を変更していくことはあり得ることは、教師と生徒の間でゆるやかに共通理解できるようにする必要があると考える。

資料3 第2学年下位者の旧様式1年時のノート

＜1年 ハンドボール＞		1年 組 番 氏名
4/25	本時の目標 ボールをねらふ方向を定める	目指す学習者像 ちやせえええ
活動内容 ミニゲーム しあいのバスケしよう	課題のポイント オーバーヘッド以外のにも、色々な方法でボールがとる方法を	
どう良かったこと 片手投げ	●に対する解決策(改善ポイント) ボールをいかにとめる しやがと手をとる	
運動について ●うまくいかなかったこと(課題) キーパー どううまくいかなかった?	改善のための練習方法 バスケしよう	
授業全体を通して 取組に力を入れたこと、守り方を決めた スペースと対峙してボールを奪取しての練習を繰り返す!	学習者像について スリルのある子	
4/26	本時の目標 仲間と力を合わせて守る	目指す学習者像 バランスのとれた人
活動内容 しあいのバスケしよう	課題のポイント ステップがわかるように守るフェーズを定める	
どう良かったこと バスケまわしが合まると一番うまくいった。Good!	●に対する解決策(改善ポイント) 片手投げのときに、手をま <small>ま</small> す <small>す</small> く <small>く</small> にする。 守り方の方向性を定める	
運動について ●うまくいかなかったこと(課題) キーパーが、いいかいいでなしとこころをいれられてしまった。 バスケがねらった方向にとはななかった	改善のための練習方法 バスケしよう 守り方の方向性を定める	
授業全体を通して 守り方をあまりマークしてなかったから、コートに侵入して、守り手と対峙して練習することができた!	学習者像について バスケの守り手	

資料4 第2学年下位者の新様式ノート

単元名	3003	学年	2	時間数	5
単元の「はじめ」に書くページ					
単元のねらい(単元を通して身につけさせたい力)					
ネットをよめることができる 人とのかわりがた					
単元を通して重点的に取り組みたい力の学習者像(当てはまるものを2つに○)					
バランスのとれた人		思いやりのある人			
コミュニケーションができる人		探究する人			
知識のある人		心を開く人			
信念をもつ人		振り返りができる人			
挑戦する人		考える人			
理由 人と協力して、点をとりたい。バスケを好きになることがしたい!					
観点ごとの目標(単元のねらいをふまえて、自分だけの目標を考える)					
CriterionA (知識と理解) バスケのルールをよめることができる。 ネットにかく					
CriterionB (活動の計画) 改善点を考え、目標を立てる。					
CriterionC (活用と実践) ネットをよめることができる。					
CriterionD (活動の振り返りと実践) 目標を達成するために改善方法を考え、実行する。					

日	本時の目標	学習内容	自己評価
9月16日	バスケのルールをよめる	ネット、バスケのルール	時間 A 態度 A 安全 A
9月17日	ネットをよめる	ネット、バスケのルール	時間 A 態度 B 安全 A
9月18日	ネットをよめる	ネット、バスケのルール	時間 A 態度 A 安全 A
9月25日	ネットをよめる	ネット、バスケのルール	時間 A 態度 A 安全 A

9月16日: ルールがあまりわかりがたいので、ネットが「まわりの」は「あつたが、それとまわりの」をわかった。
 9月17日: ネットをよめる。ネット、バスケのルール。ネットをよめる。ネット、バスケのルール。ネットをよめる。ネット、バスケのルール。
 9月18日: ネットをよめる。ネット、バスケのルール。ネットをよめる。ネット、バスケのルール。ネットをよめる。ネット、バスケのルール。
 9月25日: ネットをよめる。ネット、バスケのルール。ネットをよめる。ネット、バスケのルール。ネットをよめる。ネット、バスケのルール。

V. 来年度の課題

新様式の学習ノートにすることにより、ポイントを整理して書くことで課題の把握がしやすくなり、大多数の生徒が次時の授業のめあてに設定することができるようになった。しかし、自身の「感覚を理解し言語化」する、改善に向け「考えた実施策を実行」する、その過程を繰り返しながら活動やパフォーマンスに結びつけていくという、書くことと実践を直結させるスキルの伸長差が見られた。つまり、「よく書けているノートイコールスキルも徐々に向上」と一概には言えなかったということである。なかには、端的に言語化することで考えを整理できるようになり、自分の課題を克服していく生徒もいたが、一部の生徒であったり、限定的であったりした。今後は、上手く文章表現できないが技能面での向上が著しい生徒と、技能的なことは思い通りになかなかできないが文章表現は上手い生徒をどのようにスキルアップさせていくか、ということが課題として挙げられる。

来年度、保健体育科がとらえる資質・能力と ATL スキルとの整合性を図り、より実践的なスキル向上につながるツールとしての学習ノートとなるよう、活動と共に充実したものにすべく内容をさらに検討していくこととする。

1 拙稿 東京学芸大学附属国際中等教育学校保健体育科 「保健体育科が育成を目指す資質・能力と ATL スキルとの関連」東京学芸大学附属国際中等教育学校研究紀要 第 11 号 p p.75-81

Relationship between the Qualities and Abilities Pursued by the Physical and Health Education Division and ATL Skills:

Physical and Health Education Division

©Miyuki Hashimoto, Yumiko Fukazawa, Takeshi Sato,
Zenichi Taniguchi, Takuya Kawahara, Kunihiro Itamura

Abstract

Summary: In this school year, the Physical and Health Education Division considered consistency between the qualities and abilities envisioned by our division and ATL skills while trying to improve the latter, and also discussed how we give feedback about its development to the students.

Since our division focused on media literacy among ATL skills in dance lessons last years, some positive results were seen by expanding unit activities, and smartly exploiting the qualities and abilities students have. With this in mind, our division continued to focus on ATL skills, drastically revised the students' study notebook, and tried to improve skills through use of such a notebook. The hourly reflection performed thus far was made something that can simply and clearly record criterion C (Application and Practice). We also had our students set a goal for "each perspective" at the "beginning" of the unit, and had them reflect on "each perspective" at the "end" of the unit. A "middle" page is arranged for the unit with many numbers of hours, as a guide for students to reflect on each perspective, and to solve their own challenges towards the second half.

As a result, there were some scenes in which a student became able to smoothly "apply and practice", or to try to apply and practice what was written, such as not only "writing" in a study notebook, but also leading to a play in which they understood each other using short words, as a way to express as a movement. This can be said to be an improvement of reflection skill among ATL skills. However, this is considered difficult to describe as demonstrable positive results, because these results apply to only some students, or are limited.

Next year, our division will further examine the content of a study notebook to be more enhanced along with activities, so the notebook can be a tool which leads to practical skill improvement. We will also try to ensure consistency between the qualities and abilities pursued by the Physical and Health Education Division and ATL skills.